

# 保育者養成での歌唱力育成についての一考察

笠井キミ子<sup>1)</sup> 鶴田智子<sup>2)</sup> 久原広幸<sup>1)</sup> 柴田万代<sup>3)</sup>

## A Study about Singing Ability and Upbringing in Childminder Training

Kimiko Kasai<sup>1)</sup> Tomoko Tsuruda<sup>2)</sup> Hiroyuki Kubara<sup>1)</sup> Mayo Shibata<sup>3)</sup>

(2011年11月25日受理)

### はじめに

保育者養成校の指導者は幼稚園教諭免許、保育士資格取得に関わる歌唱指導をどのような方法で、どのような教材を使って進めていくのがより良い指導となるのか、と試行錯誤するのが現状である。実際の指導では歌唱習得目標をたて、それに即した指導をすること、目標に達していく過程を把握すること、個々への配慮ある指導をしていくことが重要であると考える。

そこで、保育者として必要な歌唱力とは何かを先ず定義づけておく。この定義項目は幼稚園教育要領、保育所保育指針〔※1〕に基づき、設定したものである。

- 1, 歌唱基礎能力の習得
- 2, 子どもの歌などを歌唱できる力
- 3, 音楽を楽しみ豊かに表現する力
- 4, 子どもの発達に即した歌唱指導力

本論文では、以上の定義に基づき、保育者養成を目指した歌唱力育成について考察していく。歌唱力育成では特に基礎能力育成のために『コールユーブンゲン』〔※2〕を中心に指導し、保育者としての歌唱力を身につけることを目指した指導法を研究する。

〔本論文で述べる保育者とは幼稚園教諭・保育士を総称している。〕

### I 歌唱力育成での取り組み

保育者に必要な歌唱力とは何か、の定義に基づき本学での取り組みをあげる。

- 1) 保育者としての歌唱に望むこと
  - ①保育者として歌好きになること
  - ②子どもたちと一緒に歌って、歌うことを楽しめる

保育者であること

- ③子どもたちの模範となる歌唱を目指すこと
- 2) 歌唱力育成として
  - ①音楽に耳を傾けること
  - ②楽譜を読む力の育成
  - ③音楽の3要素(リズム, メロディ, ハーモニー)の習得
  - ④発声法を学び、歌うことに慣れる
  - ⑤いろいろな歌を歌うことで、歌を楽しむ力をつける
- 3) 保育現場での歌唱指導に望むこと
  - ①鑑賞の場を作る
    - ・先生が歌って聴かせる
    - ・CD等の演奏を聴かせる
  - ②一緒に歌う場を作る
    - ・先生や友達と声を合わせて歌う
  - ③リズムに親しみ、楽器に触れ、歌の広がりをつくる
    - ・手拍子や簡易楽器に触れて歌うことに親しむ
  - ④音楽に合わせ、手遊びしたり踊ったりしながら歌う

4) 授業における具体的な習得目標

声楽の教科として、1年前期に「基礎声楽」、後期に「音楽Ⅰ声楽」2年前期に「音楽Ⅱ声楽」を開講。1年では基礎指導と並行して保育現場の教材である子どもの歌の歌唱(独唱, 合唱), 2年では基礎指導とともに、重唱およびオペレッタの活動を実施している。

特に基礎指導としては音楽理論, リズム練習と『コールユーブンゲン』〔※2〕の練習課題を段階的に進めている。また、声をスムーズに出すためにも発声練習を毎回実施している。授業形態はグループ指導と個別指導としている。

『コールユーブンゲン』指導については基礎指導

と応用（子どもの歌の歌唱）への展開を想定した指導を根底において進める。

そこで、『コールユーブンゲン』の指導について取り組んでいる点をあげる。『コールユーブンゲン』の各課題に示された音楽的意図を研究し、保育者養成として基礎から応用へとつなぐ方向での指導計画をたてる。また、授業は目標達成に至るまで、受講者と指導者との共通理解が必要であるとの考えから、説明が不十分にならないようにする。

次に具体的な指導では、評価をしながら理解度をチェックして進める。その点について一定期間での習得までの流れについて述べる。最初に、入学時の個人の歌唱力調査（統一した『コールユーブンゲン』課題の歌唱）により診断的評価を行う。

次に指導目標をたて、進めていく。『コールユーブンゲン』歌唱はグループおよび個別に行い、各課題を学ぶ。そして、その歌唱習得の過程として、形成的評価（指導過程における評価）をし、課題習得の状況を把握、検討していく。ここでは、個別指導を実施し、理解を助けていく。また課題の個別による習得状況については、各人で記録を作成して予習復習につなげている。

指導後の課題としては、目標に従ってどのように達成されたかについて総括的評価（指導後における評価）をし、その結果によって、個々への助言や指導を行う。

以上の流れを検証していく中で、新しい課題も生じるが、歌唱指導における課題として受け止め、以後、指導する上での継続課題にする。

（評価について『新音楽の授業づくり』を参照）

## II 『コールユーブンゲン』指導について

『コールユーブンゲン』は、1875年ミュンヘン音楽学校の合唱指揮をしていたフランツ・ヴェルナー「Franz wüllner 1832～1902」教授によって、同校生徒の合唱訓練および音楽通論の教科書として著述された。全体は初級・中級・上級の3巻に分かれているが、わが国には第1巻（いわゆるコールユーブンゲン）が明治年間に輸入され、バイエルとともに、音楽教育に大きな役割をつとめ、今日に至っている。

〔※3〕1970年 平井康三郎

原著者の序文には「楽器の助けなしにうたう」との指示がある。しかしその後では「種々の伴奏をつけて歌うことは有益である」といっているように、きちんとした伴奏譜も出版されている。伴奏をつけることによって和声感や正しい楽句法（フレーズ

グ）の能力など培われ、音楽的解釈力と表現力を伸ばすことにもつながる。

『コールユーブンゲン伴奏集』を参照

以上のことから『コールユーブンゲン』は音程、リズムを正確に読譜できるための練習教本である。『コールユーブンゲン』の構成は前半では2度音程から7度音程そしてオクターブとハ長調の練習課題が中心となっている。後半においては他の調による練習課題となっている。

この中で指導課題は基本的にハ長調の楽譜での長音階の練習曲である。そこで種々の課題をやることにより、ハ長調の音階の習得を目指す。

次に『コールユーブンゲン』の歌唱による評価としての注意点を項目としてあげる。

[A]『コールユーブンゲン』の歌唱指導要点とした、8項目とその意図

- ①予備拍（・事前準備として1小節を手でたたく・拍子や速度の確認）
- ②開始音（・最初の音をピアノの音に合わせて歌う・同じ音を出す・聴く力・音合わせ・調性の確認となる）
- ③譜読み（・楽譜を正しく読む力をつける・階名を読む）
- ④手で拍をとる（・曲の終わりまで手をたたく・一定の速さ・拍子の理解）
- ⑤音程（・正しい音程の能力を身につける）
- ⑥拍子、リズム（・正しい拍子、リズムを身につける）
- ⑦ブレスの位置（・正しいブレスの位置を守る・楽句の切れ目を認識・歌の歌詞につながるフレーズ作り）
- ⑧発声（・自然に聴きやすい発声・広がりのある音域も歌える発声）

上記で述べた[A]について保育者となって指導する際の歌唱指導と関連させた注意点を項目としてあげる。

[B] [A]の8項目に対する応用として、子どもの歌と関連させた指導法

- ①予備拍（・子ども達にも心の準備をさせる・導入での「せえの」「さんはい」の役割）
- ②開始音（・最初の音をピアノなどで音を取り、ピッチを決めて歌う・最初の音をそろえ全体で声を合わせる）
- ③譜読み（・楽譜をよく読んで子ども達に伝える・階名唱に触れる）
- ④手で拍をとる（・速度を決め一定の速さで歌う・子ども達と一緒に拍をとる・歌う時にも拍をとり

言葉のリズムを覚える)

- ⑤音程（・楽譜と同じ音程で歌う、歌の旋律を変えない・子ども達と音を合わせる）
- ⑥拍子、リズム（・拍子、リズムを把握して歌の旋律の基本をつくる）
- ⑦ブレスの位置（・模範唱でブレスの位置を示してやる・ブレスの位置を歌詞と関連させフレーズをつくる）
- ⑧発声（・自然な発声・無理な歌声にならないようにする）

Ⅲ 『コールユーブンゲン』指導での受講者調査  
『コールユーブンゲン』の形成的評価（指導過程

における評価）として、受講者の意識調査の一部をここにあげる。

1. 『コールユーブンゲン』習得状況ノート

「音楽Ⅰ声楽」の9曲を5週にわたって習得にむけた記録、具体的に学んだこと。（2010年記録）・習得状況記録

- ① 33 b ② 37 a 10月4日
- ③ 37 b ④ 39 d 10月18日
- ⑤ 39 e 10月25日
- ⑥ 40 c ⑦ 41 a 11月1日
- ⑧ 43 b ⑨ 43 e 11月8日

以下、具体的に 図1 に示す。

図1

A	具体的な練習法	学んだこと
33b	リズムが苦手だったのでゆっくり手でリズムをとり、何回も練習して少しずつ早くしていった。	歌っていたらリズムが体の中で定まってなくてふれていた。そこで息を均等に吐く練習をした。
37a	三連符が早くなったり遅くなったりしないように、拍に気をつけて練習した。	音と音の間を切る癖があるみたいで前回も言われたので、息を均等に吐く練習を続ける。
37b	四分音符が早くなりやすかったので、先ばしらないようにリズムに気をつけた。	四分音符が早くならずにできたけれど、ブレスで止まってしまったから、ブレス記号にも気をつける。
39d	リズムがなかなかとれなくて、2拍ごとに囲んで、見やすくして練習した。	ファの音がうまくとれてなかったなので、音をしっかり合わせられるようにしておく。
39e	4/4, 4/3 等、分かりやすいリズムは大丈夫だけど 8/6 は苦手なので、リズムを間違えないようゆっくり練習。	シとドの半音をしっかり意識できていないところがあったから、半音の意識をもっとしておく。
40c	リズムがとても難しくても音もいままでもよりとりにくかったため一気に練習するのではなく少しずつ練習した。	ブレスの時に思いっきり吸い込めなくて途中苦しかったのでもっと肺に入れるイメージでブレスをした。
41a	オクターブや急に音が下がる所の音程に気をつけ、6小節目が苦手だったので何回もピアノの音を聴いた。	音やリズムが狂わないように意識して歌った。もっと大きめに歌えた方が良かったと思った。
43b	この曲もやはり、リズムが難しくて分かりにくかったので、上手な友達に歌ってもらってリズムを覚えて練習した。	高いドの音が低くってみたいだったので、ピアノの音を聞きながらちゃんとした音でとれるようにする。
43e	三連符のリズムが狂わないように気をつけた。また全体的に音が高かったので低くならないように意識した。	三連符ではないリズムがちゃんとできてなかったから楽譜を見てすぐにリズムが分かるようにになりたい。
B	具体的な練習法	学んだこと
33b	リズムが難しかったので、ピアノと1と2と3と、というようにして、数えながら歌うように心がけた。	高い音のミが出にくかった。きちんと音をとって確認しておきたい。
37a	3連符が出てくるのでリズムに気をつけながら練習した。	音の変わりが激しいので、とても難しかった。
37b	37aと同じに、3連符が出てくるので、またリズムに気をつけながら練習した。	音をつなげる音符の終わりは、短くならないように気をつけることを学んだ。
39d	リズムも音程も変化が激しいのでピアノで音を確認しながら練習した。	リズムや音程もたくさん変わるので、音をきちんと聞きながら歌った。
39e	音が変化するので音を合わせられるようピアノで音を確かめながら注意して練習した。	リズムや音程など難しい部分がたくさんあるので注意し、高い音はお腹に力を入れて歌うことを学んだ。
40c	リズムや音程に注意しながらピアノに音を合わせながら練習した。	高いドからソに変わる音程の部分を中心に音が合うよう気をつけたい。
41a	音程が変わりやすいので、ピアノで音を合わせて外れないように練習した。	リズムが少し速かったので、音をきちんと合わせられるように頑張りたい。
43b	リズムが変わる曲なので、音程が外れないように練習した。	開始音の高いドは思っているより低くなっていたので意識的に高く歌うということを学んだ。
43e	リズムなどが間違っていて覚えていたので、きちんと音を聴いて確かめながら練習した。	もう少しテンポをゆっくりにして、リズムを正確にできるよう復習しようと思った。

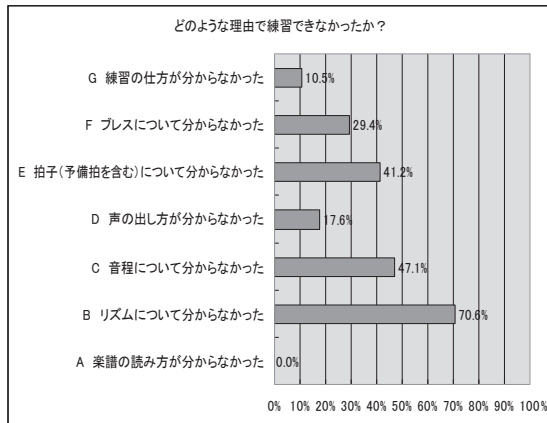
以上、AとBの事例を示したが、全員がそれぞれの課題を毎回見つけて練習をして授業に参加していることが分かる。そして、各曲毎に意識の仕方が変わり、工夫がみられる。

## 2. 授業に参加してのアンケート調査

① 2009年1月「音楽I声楽」に対して終了後の調査より

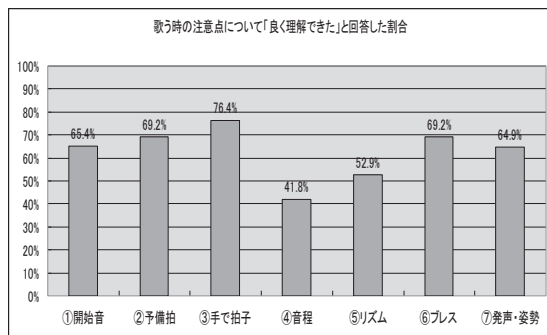
設問、『コールユーブンゲン』の課題に対して充分練習して授業にのぞむことができましたか？での回答(212名)のうち約1割は「あまりできなかった」、「全然できなかった」であった。そこでその理由としてあげられた回答項目を次に示す。

図2 どのような理由で練習できなかったか



② 2011年1月「音楽I声楽」(208名)の授業終了後の調査。設問、『コールユーブンゲン』を歌う時の注意点7項目についてよく理解できたかを尋ねた。(複数回答)

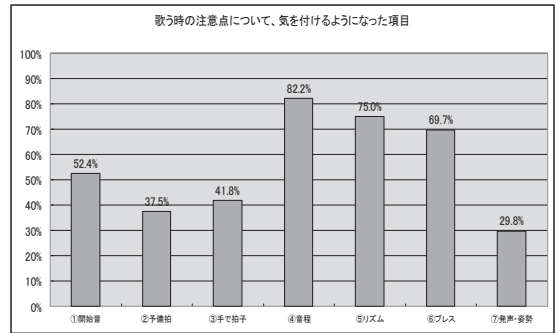
図3



次に、歌う時の注意点7項目について、さらに気を付けるようになった項目を尋ねた。(複数回

答) そのことに対する回答を次に示す。

図4



以上、1.の習得状況の記録、2.の授業に参加してのアンケート調査から、受講者が『コールユーブンゲン』の課題学習過程から歌うときの注意点を理解していく様子を見ることができた。図1～図4により、形成的評価(指導過程における評価)として指導方法への研究課題も分かり、このことを参考として指導にあたりたい。

## IV まとめ

『コールユーブンゲン』を歌う時の注意点について尋ねた調査結果は全般的に良く理解できたとの回答であった。特に音程について気を付けるようになったとの回答が多かったことは指導成果として評価できる。この結果が実際の歌唱力として歌の歌唱へとつながり、応用できるように指導していきたい。歌唱教材として音楽教育に用いられている『コールユーブンゲン』を保育者養成に合わせて指導することで、受講者には段階を経た音楽的基礎能力の習得になっていると考える。

また、指導をしながら気づいた点は、基礎指導で正しい音程やリズムを習得するまでの指導の方向性として、呼吸と姿勢のバランスがとれずに上手く歌えない場合があること、理論上での理解だけでは表現につなげにくいことがあげられる。そこで、呼吸と合わせて身体で理解できるような指導が必要であると考える。身体的に理解するためには、例えば、音楽教育学者のダルクローズが唱えているリトミックなどを応用することで、リズムを身体に覚えていく指導も考えられる。今後、そうした指導法も加えながら研究を深めたい。

保育者となった時の保育現場の指導では、発達段階として乳幼児期に聴覚の発達がめざましいことを念頭におき、音に対してしっかりと意識を向け、子

ども達の歌に耳を傾けた指導をしてもらいたい。また、歌うことに対して、正確な音程、リズムをとることで、自在な歌唱表現を習得し、楽しみながら子ども達への歌唱指導をしていってもらいたいと願う、歌唱力育成指導のまとめとする。

## 引用文献

- [※1] 『平成20年3月 幼稚園教育要領文部科学省 平成20年3月 保育所保育指針 厚生労働省〈原本〉』2008年 チャイルド本社
- [※2] 『コールユーブンゲン』（合唱教本）巻Ⅰ  
ミュンヘン音楽学校フランツヴェルナー著  
城田又兵衛 解説 1949年 音楽之友社
- [※3] 『コールユーブンゲン』伴奏集 平井康三郎  
（保喜）1970年 全音楽譜出版社

## 参考文献

1. 『ダルクローズによる アロノフ先生のリトミック教室』フランシス・ウェーバー・アロノフ著 板野平 監修 1990年 ドレミ音楽出版
2. 『保育内容 表現』黒川建一・小林美実著 1989年 建帛社参考文献
3. 『声と日本人』米山文明 1998年 平凡社
4. 『新音楽の授業づくり 音楽の授業づくり研究会編』教育芸術社
5. 『コールユーブンゲン』伴奏集 平井康三郎（保喜）1970年 全音楽譜出版社